

「有楽斎の生涯」

織田有楽の生涯

茶名「有楽」で知られる織田長益は、1547年、尾張の国（現在の愛知県西部）に生まれた。この地を支配していた織田家の当主、織田信秀（1511-1549）の11男である。有楽の兄、織田信長（1534-1582）は、後に三大武将の一人目となり、この三大武将は天下統一を成し遂げ、徳川幕府の中央集権化を実現させた。有楽は、2番目、3番目に天下統一した豊臣秀吉（1537-1598）、徳川家康（1543-1616）とも親交があった。

このような強力な武闘派との繋がりにも関わらず、有楽は武道よりも文化人としても知られ、日本史上最も影響力のある茶人である千利休（1522-1591）に茶の湯を学んだ。16世紀末から17世紀初頭の激動の時代、有楽はしばしば茶会を通じて諸派の和議を成立させた。やがて京都の寺に隠棲し、彼の重要な作品である『如庵』を建てた。

初期

有楽の少年時代は、ほとんど知られていない。1567年、20歳のとき、兄の信長と合流し、信長が征服したばかりの岐阜の地に赴いた。1581年、カトリックの宣教師がこの地にやってきて、数百人に洗礼を受けた。確たる記録は残っていないが、その中に有楽も含まれており、日本語では「ジョアン」と発音する、受洗名の「João」（ポルトガル語で「John」）を名乗ったとの説もある。この名前は、後に茶室にも付けられることになる。

1582年、災難に見舞われた。有楽と信長が京都の本能寺を訪れたとき、信長は武将の一人である明智光秀（1528-1582）に裏切られ、その軍勢に本能寺を包囲されてしまったのだ。信長は捕まることなく、自害した。伝えによると、信長の長男である織田信忠（1557-1582）は、自害するか逃げるか迷っていたという。信忠は有楽の勧めで、そのまま自害したが、有楽は退却した。

茶会を通じての調停

有楽は、織田信長の死によって幕を閉じた織田家の指南役であった茶人・千利休に師事していた。数年後、豊臣家に茶人が雇われていた頃、有楽は再び利休に師事している。また、有楽を利休七哲の一人としてあげている記録もある。

有楽の茶の研究は、当時の政局にも大きな影響を及ぼしている。16世紀後半のいくつかの重要な局面で、和平工作の一環として、有楽は茶会に出席して調停役を務めた。1585年、信長の元将軍・豊臣秀吉と、信長の次男で後継者の織田信勝（1558-1630）との間の和議を取りまとめた。その後まもなく、秀吉や秀吉の側近であった徳川家康との茶会に参加した。1586年、有楽は両者の和議を成立させた。

対立する忠誠心

1598年に秀吉が死去すると、徳川家康は権力の穴を埋めるために動き出した。家康と秀吉の後継者、家臣団との間で争いが始まり、家康は1600年の関ヶ原の戦いで勝利を取め、将軍の座を確保したのである。有楽は関ヶ原で家康の将兵の一人として振る舞い、その功績で大きな領地を与えられた。

1614年までに、家康は秀吉の側室・淀殿（1567-1615）と、その幼い嫡男・秀頼（1593-1615）を除く秀吉の残りの同盟国を制圧した。二人は大坂城に陣を構え、支持者を募り始めた。淀殿の叔父にあたる有楽は、家康との和睦を何度も勧めた。ついに交戦に業を煮やした有楽は、1615年初頭、大坂を去った。その6月、家康によって城は攻撃され、淀殿と秀頼は自害した。

隠居

大坂での経験に失望したのか、同年、有楽は京都に隠棲した。1617年、建仁寺と交渉し、老朽化した塔頭正伝院のひとつを再建し、隠居屋を建てることを許可された。1618年、完成した正伝院に移り住んだ。3年後、有楽は75歳で亡くなり、邸宅の敷地内に埋葬された。

有楽の遺志

有楽の後継者や弟子たちが受け継いだ茶の流派は「有楽流」と呼ばれ、現在でもその流派は受け継がれている。1972年3月23日には、有楽流の第15代宗家である織田長繁（1918-1992）が、有楽苑の建設に立ち会った。

有楽にとって茶の湯は、客をもてなし、快適に過ごしてもらうことが第一であった。また、茶人たちが大家のやり方を真に理解せず、独自の考えや工夫をしないで模倣することに批判的であった。このような有楽の独立心は、師匠の教えにとらわれずに、その教えを反映させた「如庵」のデザインに表れている。